アイヌル・クザート・ハマダーニー
 ‘Ayn al-Quḍāt Hamadānī (d. 1131) と
 ペルシア文学研究との接点に関する覚書

‘Ayn al-Quḍāt Hamadānī (d. 1131)
 and Persian Literature

藤 井 守 男^{*}
 FUJII Morio

西暦1131年, ウラマー側からの不信, セルジューク朝の地方政権下の政治的内紛と陰謀によって処刑されたアイヌル・クザート・ハマダーニー (Abū al-Ma‘ālī ‘Abd-Allāh b. Muḥammad b. ‘Alī-ye Miyāneji-ye Hamadānī) に関する研究の現状は, 主として, イスラーム思想史側からする思想分析のアプローチが支配的である⁽¹⁾。しかし, 筆者は, 特に, 以下の2点において, この稀代の神秘家に関する文学的研究の必要性を述べたい。第一に, アイヌル・クザートの著作全体を通じて指摘できる重要な視点の一つに, 彼が, 彼以前の, 主として, イスラーム神秘主義関連の文献に登場した, ある種の言説の中から, 元来の母体となる言説からは想像さえ出来ない程の独創的で, 大胆な言説を生み出す傾向があることである。同様の素材から, 同時代の言説の可能性を極めた, 独自のディスコース (表現形式) を生み出す一個の「表現者」として, つまり, 思想的には同類であっても, その表現の質が全く違う対象としてアイヌル・クザートはとらえなければならぬと筆者は考えている。たとえば, 彼が24歳で執筆し, ウラマーから敵対視される原因になった論文, 『真理の精髓 Zubdat al-Ḥaqā’iq』は, 形而上的, 不可視の世界の直観的認識, さらに, その言語との関係を論じた極めて独創的な論文であるが, この中で, 彼は, 神秘知の本質の把握は, 「理性を超えた段階 al-ṭawr warā’ al-‘aql」⁽²⁾ に関わることであり, 不可視界の真理に関し, ウラマーを介しない直観的把握の妥当性を説いている。この「理性を超えた段階 ṭawr」という表現は, アイヌル・クザートが一時期影響をうけたアブー・ハーミド・ガザリー (d. 1111) が, 晩年に執筆したとされる『誤りから救うもの al-Munqidh min al-Ḍalāl』の, 特に, 「預言者性 (啓示) の真理 ḥaqīqat al-nubūwa」⁽³⁾ の部分で展開される一連の言葉に靈感をうけたものと筆者は推

* 東京外国語大学助教授
 Associate Professor, Tokyo University of Foreign Studies

察する。ガザリーが慎重に言葉を選んで進めた議論を、アイヌル・クザートは、自らの信じるままに理論的な徹底性を大胆に貫くことで、およそ、ガザリーの文言からは想定できないほどのラディカルな結論を導き出している。「理性を超えた段階」の認知は、すなわち、「理性」の否定であり、これは通常の人間が預言者性を識る道を閉ざす、として、彼は、ウラマー側から批判された。内容としてはガザリーの文言と同類であっても、その表現の仕方が決定的に違う（どこが、どのように相違するかについてはここでは触れない）という点に、こうしたウラマー側からの不信が胚胎していると考えることが必ずしも妥当性を欠くとは思われない。「理性を超えた段階」という発想は、元来の母体であるガザリーの言葉というより、むしろアイヌル・クザートの知的構想力によって初めてイスラーム世界の精神文化に組み込まれたといつてよい。

さらに、ペルシア系の神秘家達の詩文で展開された、『コーラン』の中で呪われた存在である悪魔を崇拝する「イブリース（悪魔の頭目）賛美」の言説については、特に、こうした傾向が指摘できる。「イブリース賛美」論は、元来は、ハッラージュ（d. 922）を母体とし、ホラーサーンの神秘主義者達の内部で独自の姿を見出したとされるが、その継承者であったアフマド・ガザリー（d. 1126）から直接的影響をうけて、「イブリース賛美」を最大限に、異様な程に拡大・展開し、「イブリース賛美」論をイスラーム世界に定着させたのは、他でもないアイヌル・クザートであった。思想傾向の並列的な吟味の過程に、一個人内における「思想」生成のダイナミズムへの視座が必要とされるところに、アイヌル・クザート研究の一つの特徴があるのではなかろうか。

アイヌル・クザート研究における「文学」的主題の顕在を主張するもう一つの根拠は、上記のように、思想を、その思想を生み出す個人（及び、その個人を取り巻く広義の環境）とのかかわりの中から捉えようとする際に副次的に惹起される問題にかかわる。これに関連して特に重要なのが、西暦11～13世紀のペルシアの神秘家たちの詩文のほとんどが、基本的に、アシュアリー派神学の教義を土台として生み出されていたという点である。単なる言語表現としての「文学語」として解析することでも、勿論、神学や哲学を「文学」と無縁な自己完結的な体系と考えることでも、アイヌル・クザートを含む、この時期のペルシア系の神秘家たちの「言葉」の本質に迫ることはできない。神の言葉は、唯一なる神の属性の一つであり、『コーラン』は神とともに永遠である、としたアシュアリー派は、神的属性の一つとして神に内在し、神と共にある永遠の「内部言語 kalām nafsi⁽⁵⁾」と、通常の音や文字によって表現される「表層的言語表現 kalām lafẓi」を区別した。神を己の中に見出す、信仰の内的経験を土台して現実界の文字、音声言語が表象として機能する、とする言語観は、来世での「神」との対面を教義的に保証した「見神」理論 ru'yat によって生み出された、「美しい姿の神」を官能的に詠う神秘主義詩を支え

る、独自の神学的「意味論」として重要な機能を担ったと言える。サナーイー Sanā'ī (d. 1141), アッターール 'Attār (d. 1221/9), ルーミー Rūmī (d. 1273) といった人々の世界観の背後には、真なる実在たる神を主軸に据えたアシュアリー派的「決定論 jabr 的世界⁽⁶⁾観」がどっしりと座をしており、セルジューク朝ペルシアの支配原理を体現した神学的世界が、そのまま彼らの詩文生成の原動力となっていたことは否定できない。

アイヌル・クザートも、アシュアリー派に属すと考えられるが、神学的、哲学的素養の中から彼が生み出してきた独創的な「意味論」(『真理の精髓』の中の議論との関連性、あるいは、ムタズィラ派教義からの影響などについては今後の研究課題である)は、修辞論的 balāgha にも同時代の枠組みを超え出たものである。アイヌル・クザートの書簡集の中に登場する以下の箇所等は、神学的「意味論」の中から「神秘家の詩学」とも言うべき研究の地平が開かれていることを図らずも告げていると思える。

「気高い者よ。詩というものは鏡のようなものと考えよ。鏡には、鏡自身を映し出す顔はない。鏡を見る者が、各自、自分の顔を見ることになるのだ。それと同様に、詩には、それ自身では<意味>というものはまったくないのだ。……もし、詩の<意味>が、それを詠む人が望んだものであると同時に、他の人々が、思うままに、別の<意味>を付与するものであるとするなら、それは、鏡の表面の姿が、最初⁽⁷⁾にその表面に写った研磨職人の顔である、ということと同じことだ。……」

詩自体、言い換えれば、テキストは、それ自体では「意味」というものを持ち得ない。もし「意味」というものがあるとすれば、それは詩を読む、あるいは、詠う、「読み手」が望むままにテキストに加える各自の解釈があってはじめて生まれるものである。ここでは、「読み手の解釈によって生まれる意味世界」こそが、アイヌル・クザートの「意味論」の根本をなしている。「意味」がそれ自体として、自立的に存在することを明確に否定しているこの文章は、20世紀の後半に、神学的存在論を土台とする形而上学的世界の決定的終焉を告げた体系の中で、「客観的な意味」が否定し尽くされた姿と組み合わせると、興味深いものがある。まさに、現代世界で、否定し尽くされたかに見える「神学的存在論」に依拠しつつ、現在より900年程前に、テキストは読み手の解釈によってこそ成立することを訴えたアイヌル・クザートを再評価することは、思想史的課題であるよりは、一つの「文学」の課題であるように思える。

注

- (1) 近年、アイヌル・クザートに関して、特に、晩年の約2年(バグダードの獄を開放されてからハマダーンで処刑されるまでの空白の時間のことで、書簡には、姿を隠

して放浪する身を嘆く箇所もあるが、実体は不明であった)、彼の死後のスーフィー達からの冷淡な対応(100年以上経て、スーフィー側から登場する最初の評価はシャムセ・タブリーズィーの否定的な言葉であるとされる)、ゴム市で発見された彼のアラビア語詩集(神秘学的傾向はみられないもの)、その他、彼に関する情報の根本的見直しをせまる内容の研究が現れた。Moṣṭafā Mūsavi, “‘Ayn al-Quḍāt-e Hamadāni: Shegefti-ye ‘Ālam-e Ensāni,” *Īrān-shenākht*, Tehrān, 1988, 74-135. テヘラン大学に提出された博士論文の全体の約5分の1程度がここに掲載されているが、アイヌル・クザートに関する注目すべき論考であり、全体像が把握出来次第、機会を改めて、この研究については詳細な紹介を試みる予定である。

- (2) 勿論、ここに、イブン・スィーナーからうけた哲学的影響があるが、ここでは特に、この「理性を超えた段階」という表現を問題にしている。この al-Ṭawr warā’ al-‘Aql (理性を超えた領域、段階) については、「アフレ・ハック Ahl-e Ḥaqq 派」との関連性を疑う向きもあるが、議論は混乱している。‘A. Zarrīnkūb, *Jostojū-ye Taṣavvof-e Īrān*, Tehrān, 1979, 196, 199-200. また、後のイスラーム世界で、一部の神秘哲学の徒にうけいられることになる、この「理性を超えた段階」という表現が、『誤りから救うもの *al-Munqidh*』以前、使用されたことがあるかどうかについては、残念ながら、筆者は知識を持ち合わせない。
- (3) Abū Ḥamid al-Ghazālī, *al-Munqidh min al-Ḍalāl*, n.d., Beyrouth, Dār al-Andals, 145-9.
- (4) アフマド・ガザリーの『説教談話集 *Majāles*』が校訂され、アイヌル・クザート以前で、「イブリース賛美」論の最重要な存在であったアフマド・ガザリーの「イブリース」に関する説に直接触れられることになった。A. Ghazālī, *Majāles*, ed. Aḥmad Mojāhed, Tehrān, 1988.
- (5) al-Qāḍī Abū Bakr b. al-Bāqillānī, *al-Inṣāf*, Cairo, 1963, 106-09.
- (6) ここでいう決定論的世界と前述の「理性を超えた段階」との相互関係についても稿を改めて論じたい。
- (7) ‘Ayn al-Quḍāt Hamadāni, *Nāme-hā-ye ‘Ayn-al Quḍāt-e Hamadāni I*, 216.